

【調査記録】

シロイルカが島根に来た経緯 ——連邦崩壊前夜の訪ソ団

諸岡了介

（島根大学教育学部）

摘 要

本稿は、江津市と浜田市に所在する「しまね海洋館アクアス」にシロイルカが導入された経緯を、関係者への聞き取り調査をもとに記録したものである。そのきっかけは、ソビエト連邦崩壊直前の1991年10月、ロシア連邦沿海地方政府の招待でウラジオストクとナホトカを訪れた鳥取県・島根県友好親善訪ソ団に遡る。このとき、当時の澄田信義島根県知事が散歩中に偶然シロイルカを目にしたことが、石見海浜公園整備計画の一環として、2001年に開館するアクアスの目玉にシロイルカを迎える契機となった。日露関係が紆余曲折を続ける中でも、ロシアとの地域交流の証しであるシロイルカたちは、島根県のアイドルとしてすでに四半世紀近くの時を過ごしている。

キーワード：浜田市、江津市、水族館、ロシア、ソビエト連邦

はじめに

島根県のシロイルカ（別名ペルーガ）といえ、2000年に開館し、江津市・浜田市にまたがって所在する水族館「しまね海洋館アクアス」一番の人気者である。口から泡でできた輪を吐き出すバブルリングという技を得意とし、2007年には「島根のおじさま」としてテレビCMに出演するなど、現在も彼らを目当てに年間30万人以上の人々がアクアスを訪れる（2022年の実績、石見地方の観光施設としてはトップ）、島根県のマスコットの存在となっている。

2024年現在、日本国内でシロイルカを見ることができるとは、横浜・八景島シーパラダイス（神奈川県）、鴨川シーワールド（千葉県）、名古屋港水族館（愛知県）とアクアスの4ヵ所だけだが、いったいなぜ、島根県にシロイルカが来ることになったのか。事情を知る島田一嗣さんにかがった話を中心に、島根とロシアの交流史の一場面として、その経緯を記しておきたい¹。

管見のかぎり、島根とロシアの交流史の記録については、行政など関係組織による活動報告

¹ 島田一嗣さんには2024年3月26日にお話をうかがった。また、それに先立つ2024年2月18日には、しまね海洋館経営課の足達浩司さんにもお話をうかがった。この場を借りて、両氏のご協力に感謝を申し上げます。また、訪ソ団発足の経緯等に関しては、注記した文献のほか、鳥取県公文書館蔵「事前訪ソ団関係綴」を参照した。

や、ごく一般的な概観しか見あたらない²。焦点をしぼってその一場面を取り上げた本稿は、とくにソビエト連邦崩壊前後の動きが激しかった時代の出来事を扱っており、当時の状況をうかがうための一材料になりうるものとも考えている。

訪ソ団派遣にいたる経緯

その「シロイルカとの出会い」があったのは、1991年(平成3)ウラジオストク市内でのことだったというが、まずはそこにいたった事情を整理しておきたい。

かねてより島根県は、1968年に田部長右衛門知事が訪ソして「島根県日ソ貿易協同組合」を設立し、1986年には恒松制治知事が同じようにソ連を訪れて「島根県日ソ親善協会」を設立するなど、ロシア、とくには距離の近い沿海地方との交流を図ってきた³。しかし、1991年10月に島根県と鳥取県が共同でウラジオストク市とナホトカ市に派遣した訪問団は、参加人数が100名を超える、いままでになく大規模なものであった。

その発端といえるのは、ペレストロイカの旗印のもとに進められた、当時のゴルバチョフ書記長の政策である。1986年7月にウラジオストクを訪れたゴルバチョフが環日本海経済圏の形成を提唱する演説を行うと、低開発に甘んじていたロシア沿海地方側でも、またビジネスチャンスを狙う対岸の日本側でも、本格的な経済協力を進めようという機運が高まることになった。1989年にゴルバチョフ書記長とブッシュ米大統領(父)が冷戦終結を宣言すると、その期待感はさらに強くなった。

その一方で、計画経済からの具体的な開放政策は漸進的にしか進められなかったし(たとえば、ウラジオストク市の完全開放は1992年1月を待たねばならなかった)、1990年になると、6月にロシア共和国が「主権宣言」を採択し、12月にはシュワルナゼ外務大臣が辞任するなど、ソ連の国家体制や国内情勢が不安定な状態に陥ったことで、国際交流に前向きになっていた日本側の企業や自治体も、事態の推移に注意を払う必要が生じていた。1991年4月のゴルバチョフ大統領の来日は対日経済開放政策の進展を期待させたが、1991年8月にはゴルバチョフがクリミアに軟禁されるクーデター未遂事件が起き、12月にはとうとうソビエト連邦の解体を迎えることになった。島根県・鳥取県の訪ソ団が派遣されたのは1991年10月のことであり、まさにそうした揺れ動きのはざまにある時期であった。

山陰両県から訪ソ団が送られる具体的なきっかけをもたらしたのは、いちはやくロシアとの合弁企業設立に乗りだした境港市の大伸水産の動きである⁴。大伸水産は1989年からロシアとの漁業の合弁について交渉を行っていたが、その話が具体化した1990年の10～11月、大伸水産の大森溥明社長がウラジオストクに滞在した際に、クズネツォフ沿海地方執行委員会議長から鳥

² 行政報告のほかに島根県とロシアとの交流史を取りあげた著述物には、内藤正中編『島根県の環日本海交流』(今井書店、1993年)などがある。江津市和木町のイルティッシュ号事件関連の歴史については別途発表を予定している。

³ 島根県総務部国際課『島根県の国際化の現状』(2001年)。

⁴ 大伸水産は1991年、エビヤカニの加工品輸出などを事業とした、ダリモレプロダクト(ソ連極東水産物加工公団)との合弁会社 DDS ジャパンを設立している。環日本海経済研究所『ERINA report』(10)、1996年4月、35頁、および国際協力銀行中堅・中小企業支援室『ロシアの投資環境』、2007年。

取県・島根県知事に宛てられた招待状を預かったのである。

当時の沿海地方執行委員会議長（後に行政長官）ウラジーミル・クズネツォフは、「地方主導の国際戦略」を担って、この地方の開放政策を強く押し進めようとしていた進歩的リーダーであった⁵。連邦政府の動揺は、ロシア共和国や沿海地方政府に以前より自由な動きを可能にしたという面があり、エリツィン率いるロシア共和国政府は、1990年11月に沿海地方ではナホトカを自由経済特区に指定して、クズネツォフの政治方針を後押ししている。

鳥取・島根の両県もクズネツォフ議長からの招待を受けることに決めると、外務省に赴いて国内広報課・ソビエト連邦課と情報交換をしたり、1991年3月と8月には事前の調整と下調べをすべくウラジオストクやナホトカへ県職員を派遣するなど、準備を進めている⁶。また、民間団体としては鳥取県日ソ親善協会訪ソ団が一足早く、1991年7月にウラジオストクを含むロシア国内5都市への訪問を実現している。

1991年 鳥取県・島根県友好親善訪ソ団

以上のような経緯のもと、1991年10月21日から25日までの期間、鳥取県・島根県の共同による訪問団が、ウラジオストク市とナホトカ市を訪れたのである⁷。この「鳥取県・島根県友好親善訪ソ団」は、澄田信義島根県知事と西尾邑次鳥取県知事や、石倉孝明松江市長、大谷久満浜田市市長、西尾遼富鳥取市長、黒見哲夫境港市長らを含む「代表団」のほか、民間の商業・産業関係者を主とする「経済第一団～第三団」に「報道団」を加えた、総勢111名からなる組織であった。

以下、島根県総務部秘書課課長として同行し、代表団の世話役を務められた島田さんからうかがったお話を中心に紹介していきたい。

⁵ 堀内賢志『ウラジオストク』東洋書店、2010年、13～22頁。

⁶ 1991年3月における事前調査は、大伸水産の大森溥明社長らに鳥取・島根両県の職員が同行するかたちで行われたが、このときの参加者15名のうちには、広島県尾道市・沼隈町のマリンパーク境ガ浜（瀬戸内海中部開発）の水族館副園長と職員とが名を連ねている。シロイルカの生け簀を見学した様子もあり、あるいはその導入を検討していたのかもしれない。

⁷ 1991年訪ソ団の組織やスケジュールについては、鳥取県企画部文化国際課『「鳥取県・島根県友好親善訪ソ団」ロシア連邦沿海地方訪問の記録』（1992年）を参照した。

表・鳥取県・島根県友好親善訪ソ団・代表団の動き

10月21日	ウラジオストク空港着／結団式
10月22日	オリムピックスポーツ宮殿視察 極東船舶公団(フェスコ)訪問 ウラジオストク市役所表敬 極東総合大学視察 沿海地方政府表敬 沿海地方政府主催夕食懇談会
10月23日	ナホトカ市役所表敬 在ナホトカ総領事館表敬 日本人墓地参拝
10月24日	ウラジオストク市内視察 沿海地方政府訪問(「友好交流に関する覚書」調印) 市内視察 ゴーリキ劇場での観劇・お別れ夕食会
10月25日	ウラジオストク空港発

10月21日、島根県側のメンバーが出雲空港を出発し、いったん鳥取空港で鳥取県側のメンバーと合流してから、新潟空港を経由してウラジオストクに着いたのは午後3時すぎであった。当時、ウラジオストクには富山空港経由で向かう選択肢もあったそうだが、出入国手続きの関係で新潟経由になつたらしいとお話であった⁸。

まだソビエト連邦の一部であった当時のウラジオストクの街並みについて、官公庁や劇場といった公的な建物の立派さと、電気やトイレなどの生活インフラの劣悪さが同居していることが島田さんには印象的だったという。代表団が泊まったのは共産党幹部のための保養施設であったが、これも粗末な建物だったそうである⁹。物資も乏しく、夜な夜な宴会をするのだが、調達できたのはハイネケンが一人1本で、ウォッカも少しだけ。朝食も、連日焼いていない黒パンにミニトマトといった内容で、イクラだけはたっぷりあったというお話であった。夕食などに出てくる魚はぜんぶミンチで、揚げ物やハンバーグ様のものだったという。

市内の市場には人びとが行列をなして、食糧不足の様子がうかがわれたという。視察の一環としてデパートを訪れると、トイレには新しい紙が備えつけられていないばかりか、そもそもそのトイレの数が3階ごとに1カ所のみといった具合で、島田さんは、こちらの人は身体が大きい分、回数が少ないのかと想像したほどだったという。街の中には日本から持ち込まれた中古車が走っており、ウラジオストクからナホトカへ向かう峠道では、坂道の途中で故障し、乗り捨てられた車がいくつも放置されていたという。経済面でも混乱があり、ルーブルの為替

⁸ なお、ウラジオストク空港は1991年1月に国際化されたばかりで、定期航路も開かれていない状況であった。日本からは、5月に運航された富山県からのチャーター便がはじめての到着便であった。

⁹ 当時の資料によると、ソ連政府または共産党幹部の別荘であった国営別荘(ゴスダーチャ)を迎賓館として利用するようになったもので、代表団が宿泊したのはパンシヨナットという名前の施設であった。

レートが3種類もあるとかで、現地との経済交流を図ろうとした経済団の人たちも困惑していたとのことである。

シロイルカとの出会い

さて、本題のシロイルカの話である。ウラジオストクに到着して一夜明けた10月22日、代表団は、国の選手強化施設であったオリンピックスポーツ宮殿を視察する予定になっていた。はやくに集合場所に到着した澄田信義島根県知事と島田さんは、まだ時間があるとのこと、宮殿の目の前にある港を散歩することにした。すると、港の岸壁に孟宗竹のようなもので囲った生け簀があって屋外水族館のようになっており、白く見慣れない動物が、上から見た感じでは3～4頭泳いでいたという。これがシロイルカであった。

シロイルカを目にした澄田知事の最初の感想は、「珍しい、大きな魚だな」というものだったという。この当時、島根県では雇用創出を主目的とした県立石見海浜公園の整備計画（「遊空間」構想）の話が動き出しており、水族館を社会教育施設として設けてはどうかという案も議論されていた。島田さんの回想によれば、澄田知事と散歩をしながら「どちらかとなく」、その水族館にこのシロイルカという動物を呼べば、国際交流の証しにもなり、集客も望めるのではないかというアイデアが浮かんだのだという。このとき、澄田知事は、ロシア側からシロイルカを贈ってもらえればと話したそうだが、島田さんは、この国の事情を考えて、「ただではくれませんよ、購入しないと」とアドバイスをしたそうである。

この後、オリンピックスポーツ宮殿にて1時間半ほど見学をしたが、そこでは講道館柔道六段を有する常田享詳鳥取県議会副議長が、現地の選手に稽古をつける一幕もあったそうである。5日間の滞在中、代表団としては、極東総合大学の視察やナホトカの日本人墓地の参拝をしたほか、島根県・鳥取県・沿海地方政府の三者にて「友好交流に関する覚書」の調印を行っている。

しまね海洋館アクアスの開館

訪問団の帰国後しばらくすると、澄田知事の指揮のもとに水族館設置事業が本格化していき¹⁰、1996年8月には、シロイルカ購入の具体的な段取りについて、ウラジオストクの国家単一企業・太平洋水産研究所（TINRO）と協議を始めている¹¹。1999年1月には、当時3期目を迎えていた澄田知事とTINROの名義にて、オス1頭・メス3頭の購入契約書を交わすにいたっている。シロイルカは、通常の動物園・水族館市場では購入することができず、個別に交渉しないと手に入れられない動物だとのことである。

¹⁰ 島根県企画振興部定住企画課主幹としてアクアス開館の準備にあたった石井英次氏の回想記によれば、1995年度まで、石見海浜公園整備計画の基本構想は映像を利用した「海洋型ミュージアム」の建設であったところ、1996年度になってから実物を展示する水族館を整備するという方向に定まり、澄田知事からシロイルカ導入の指示が出たのだという（島根県地域振興部監修『しまね県政史年表』山陰中央新報、2006年、78頁）。

¹¹ 前掲、島根県総務部国際課『島根県の国際化の現状』（2001年）。

1999年9月、ポポフ島で飼育されていた4頭のシロイルカは、ウラジオストクからのチャーター便で広島空港に搬送され、広島からは陸送されて島根に到着した。当時搬送に付きそったスタッフのひとり、足達浩司さんは、ポポフ島からシロイルカが到着するまで、ウラジオストクで何時間も足止めを食らったことが記憶に残っているという。2000年4月、こうして「しまね海洋館アクアス」の開館を迎えることになったが、そのオープニング式典には、TINROの副所長2名も参加している。

島根にやってきたシロイルカたちはさっそく人気者となり、アクアス開館初年度の入場者数は135万人に達した。2003年4月にロシアから浜田港経由でさらに2頭を導入したほか、2009年には初の「島根県生まれ」のシロイルカが誕生している。また、シロイルカ自身の遊びからはじまって、スタッフとのトレーニングの末、2005年からパフォーマンスとして披露するようになった技「バブルリング」によって、アクアスのシロイルカは全国的な知名度を得るにいたっている。

おわりに

「鳥取県・島根県友好親善訪ソ団」が訪れた2ヶ月後、1991年12月にソビエト連邦は消滅することになったが、訪問の際に調印した沿海地方政府との「覚書」にもとづいて、その後もロシアと鳥根県および鳥取県とのあいだで交流事業が企画・実施されている。鳥根県についていえば、1993年9月と1994年9月に沿海地方政府代表団を受け入れたり、実務協議団を相互派遣したり、ナホトカ市の患者をたびたび鳥根県立中央病院に受け入れたりといった事業がなされている。しかし、後の鳥根県全体への実質的な影響を考えるなら、シロイルカをアクアスに迎え入れるきっかけを得たことが、このウラジオストク訪問のもっとも大きな収穫であったと言えるかもしれない。

島田さんはその経緯を「ひょうたんから駒」と表現されたが、空き時間の散歩中にシロイルカに遭遇したことは、まったくたまたまのことであった。訪ソ団のタイミングとしても、連邦の体制変化の中にありながらロシア・沿海地方政府側と鳥取県・島根県側の思惑が合致したこと、鳥根県側では石見海浜公園の整備計画が動きはじめていて、かつまだ具体的計画が固まっていない段階であったこと、シロイルカに出会った澄田信義知事が5期という長期にわたって県政を担い、アクアス開館までを指揮したことなど、数々の「偶然」が重なって、鳥根県にシロイルカがやってくるようになったわけである。なお、今回お話をしてくれた島田一嗣さんは、2008年に鳥根県庁を退職後、2013年からしまね海洋館(アクアス)の理事長を務めておられる。

シロイルカたちの現在に触れておくと、1999年到着組のうち、ケーリャは2023年8月に、アーリャは2024年7月に死亡したため、2024年12月現在、健在なのはナスチャの1頭である。このほか、2003年到着組のアンナとランゲルに加え、2009年と2014年にアクアスで生まれたシーリャとミーリャのほか、2024年には立て続けに2頭が新たに誕生して、総勢7頭となっている。

2022年2月に開始されたウクライナ侵攻以来、日本とロシアとの国交は断絶に近い状況が続いているが、鳥根県・鳥取県とロシアとのあいだで結んだ交流からやってくるようになったシ

ロイルカやその子どもたちは、スタッフに大事にされながらアクアスに暮らし、現在もかわらずに多くの来場者たちに愛されている。

The History of the Belugas' Arrival in Shimane

MOROOKA Ryosuke

(Faculty of Education, Shimane University)

[A b s t r a c t]

This article documents the historical process of introducing beluga whales to the *Aquas* aquarium, located in Gōtsu and Hamada cities, Shimane Prefecture, based on interviews with key participants.

The story begins in October 1991, just before the collapse of the Soviet Union, when the Tottori-Shimane Friendship Delegation visited Vladivostok and Nakhodka at the invitation of the Primorsky Krai Administration in the Russian Federation.

During this visit, Nobuyoshi Sumida, the then Governor of Shimane Prefecture, happened to see belugas while taking a walk. This encounter became the catalyst for featuring the charming animal as the main attraction of *Aquas*, which opened in 2001 as part of the Iwami Seaside Park development plan.

Despite the ups and downs in Japan-Russia relations, the belugas, an enduring symbol of regional exchange, have spent nearly quarter of a century as cherished icons of Shimane.

Keywords: Hamada city, Gōtsu city, aquarium, Russia, the Soviet Union